

近代奈良のイメージ形成

— 和辻哲郎と以後の精神史において —

Formation of Image in Modern Nara:

Intellectual History after Tetsuro Watsuji

Maki Kitahiro

北廣 麻貴

要 旨

本論稿は、奈良のイメージ形成とその変遷について、精神史という概念および研究方法を用いて考察している。精神史という概念および研究方法は様々な研究領域で使われているが、本論稿では様々な文献を考察し、精神史とは、歴史的事実を追求することではなく、後世に生きた人々が歴史上の出来事をどのように受容してきたのか、ということを追求する研究方法であると定義する。

本論稿の出発点とした和辻哲郎『古寺巡礼』における奈良の捉え方は、実は世界に目を向けたものであり、その捉え方は、単純に和辻の個人的な見解というよりも、当時の時代背景が深く関わっていたことを指摘する。『古寺巡礼』における奈良のイメージが後の文化人や一般読書界にどのように受容されてきたのかということ考察するにあたり、ガダマーの哲学的解釈学の中心概念である影響史について触れている。ガダマーの「地平の融合」によって考えるならば、現在の奈良は、歴史的な事実と和辻の与えた新しいイメージの融合として理解することができる。人々はその融合したイメージの奈良を受容しており、和辻もまた、融合されたイメージのもとで奈良を論じている。ここで融合の連鎖が行われているといえる。しかし、和辻が解釈した奈良とヨーロッパが文化史的影響関係にあるという見方は、時代とともにアジアとの影響関係にあるという見方に変化している。そのイメージ変遷の要因を、岡倉天心や柳宗

悦を手掛かりとして、近代奈良のイメージが多次元的に成立していることを指摘する。

これらの考察を踏まえたうえで、現在の奈良におけるイメージの広がりをネットワーク化されたイメージとして述べる。つまり、これまで受容されてきた『古寺巡礼』における奈良のイメージが分化し、共存しているといえる。こうして、多次元に捉えることができる現在の奈良を、世界と日本をつなぐメディア都市であると定義付けることで、本論稿の結論とする。

キーワード：近代奈良、イメージ、精神史、変遷、和辻哲郎

序 章

時代の流れによって、多くのものは価値観や受容の仕方が変化していく。本論稿では、かつての日本の中心地であり、数々の世界文化遺産を保有していることから、現代では観光地として多くの人々が訪れている奈良のイメージとその変遷について、精神史という概念および研究方法を用いて考察する。

人々はどのような奈良のイメージを受容し、理解してきたのだろうか。また、そのイメージが過去から現在へと時代が移り変わる中で、どのように変化してきたのだろうか。精神史の視点から、時代による奈良のイメージや位置付け、これまでの奈良のイメージから現在の奈良のイメージについての変遷について論じる。

精神史という概念および研究方法は、さまざまな分野で用いられているが、その言葉の意味の捉え方は研究者によって少しずつ異なっている。

本研究では建築史家である井上章一の著作『法隆寺への精神史』¹に触発され、精神史とは、歴史的事実を追求することではなく、後世に生きた人々が、歴史上の出来事をどのように受容してきたのか、ということを追う研究方法であると定義する。本研究で精神史という研究方法を採用した理由としては、奈良に関する歴史的事実についての真偽の判定を行うことではなく、あくまでもそれぞれの時代を生きた人々の奈良の印象に関することを論じてきた人々の精神について考察したいという理由からである。

また、本研究では、和辻哲郎の『古寺巡礼』²を出発点として考察を進めるが、和

辻個人に焦点を当てた研究ではないことを予め述べておきたい。『古寺巡礼』は奈良に関して、後の文化人や一般読者に多大な影響を与えた著作である。『古寺巡礼』によって、かつて日本における政治の中心地であった奈良が、世界と文化史的影響関係にあるというイメージへと繋がり、文化人や一般読者に受容された。

続いて、『古寺巡礼』の具体的な内容についても触れ、和辻が『古寺巡礼』においてどのように奈良を捉えてきたかということについて考察する。そこから、和辻が奈良を旅しながら実は世界に目を向けていたことについての意味を論じる。和辻の捉え方は、単純に個人的な見解というよりも、当時の時代背景が深く関わっていたとみられる。

本研究において考察の対象となる時代は、出発点として位置付けた和辻哲郎『古寺巡礼』が発表された大正時代から、2010（平成22）年に平城遷都1300年を迎え、更なる注目が奈良に集まったといえる現在までである。

第1章 精神史からみる近代奈良

第1節 方法としての精神史

序章で述べたように、本研究では精神史という概念および研究方法を用い、奈良のイメージを論じる。精神史という研究方法は、さまざまな研究領域で用いられている。例えば、佐藤忠良他『遠近法の精神史——人間の眼は空間をどうとらえてきたか——』³、比屋根照夫『近代沖縄の精神史』⁴、平野仁啓『古代日本精神史への視座』⁵、井上『法隆寺への精神史』などが挙げられる。しかし、各々の文献において精神史の捉え方が少しずつ異なっている。以下、いくつかの著作を例に挙げ、その差異を考察したうえで本研究における精神史を定義付ける。

佐藤他『遠近法の精神史——人間の眼は空間をどうとらえてきたか——』は、遠近法というキーワードを中心にし、議論の対象とする絵画が書かれた当時の技法や構図について、その時代背景に関連付けながら論じている。平野『古代日本精神史への視座』は、「第1章 縄文時代の精神構造」、「第2章 弥生時代の精神構造」……「第6章 天平時代の精神構造」というように、時代ごとに順序良く述べられている著作である。例えば、第1章では、縄文人の自然観や空間・時間意識、死生観について、縄文人が生きていた当時の事実に基づいて考察されている。

これらの考え方における代表は石田一良であると言えるであろう。日本文化史の泰斗である石田は、『日本精神史』⁶において、精神史の研究とは、歴史的な出来事に関して研究者の個人的な意見を述べるのではなく、その歴史的出来事や当事者の精神の在り方を成り立たせる精神的な根拠について明らかにすることが目的であると述べている。しかし、この著作で石田が問題にしているのは、歴史的な出来事の実事性についてである。『日本精神史』における時代区分を参照すると、「奈良・天平時代篇」、「鎌倉・室町時代篇」……「明治・大正時代篇」といったように構成されている。このような歴史上の出来事について石田は、その出来事が起こった当時の人々の精神について編集者の立場から述べている。第1章は、安井良三が古代寺院建立の精神について考察している。そしてそれは「第1節 飛鳥寺建立の背景」、「第2節 大野丘塔と飛鳥寺塔」……「第7節 薬師寺の建立」と続く。しかしこの文献は、例えば飛鳥寺が建立されたという事実が後の人々の精神にどのように影響したか、という歴史的な影響を読み解くことを目的としていない。なぜならば、この文献において石田が述べているのは、例えば寺院を建てた当時の人々の精神であって、寺院を建てた当時の人々について論じてきた人々の精神ではないからである。

このような石田らの論に対し、秋山聰『聖遺物崇敬の心性史－西洋中世の聖性と造形』⁷は、過去に残された聖なる人の遺骨や衣装などといった聖遺物の具体的な議論ではなく、その聖遺物がなぜ残されたか、残した人々にはどのような観念があったか、ということについて議論されている著作である。秋山は聖遺物の具体的内容ではなく、それが残された意味そのものに関心を寄せており、この著作において精神史という言葉は直接使用されていないが、この考え方は精神史とも共通すると考えられる。

建築史家である井上章一は、『法隆寺への精神史』において次のように述べている。井上は、法隆寺の歴史やその建築様式についてではなく、法隆寺を論じた人々の観念とその推移に関心を寄せていた⁸。井上は法隆寺の柱とギリシア神殿の柱の類似性、そして法隆寺の伽藍配置について、その真偽を判定することではなく、その説が一般化してきた時代背景やその推移について考察することを焦点としている。そのため、『法隆寺の精神史』は、法隆寺の建築者やその周辺人物の詳細、法隆寺の繁栄や衰退といった歴史的事実を論じることを目的とした著作ではないといえる。

法隆寺の柱は正確な丸柱ではなく、そのなかほどが少し膨らんでいる。これは一般

的には建築の外観に視覚的な安定感を与えるための細工であると考えられている。それはエンタシスと呼ばれ、ギリシアの古典建築にも同様の柱が見られることから、法隆寺の柱とギリシア神殿の間に何らかの関係があるのではないだろうかと考えられている。

しかし、法隆寺とギリシア神殿の柱の類似性に関する確かな証拠は存在していない。井上によると、建築史や美術史の研究者の中でこの話に同意している者は少なく、なかには否定する者もいるという。しかし、その否定説に同意する者もおらず、法隆寺とギリシア神殿の柱の伝来関係について論証もできなければ反証もあがらないということがいえる。ここで注目しておくべきことは、そのような確かな証拠がない曖昧な仮説が、美術史学界や建築史学界といった学界のみならず、広く世間一般に広まったという事実である。井上は法隆寺のエンタシスに関する紹介箇所を、小学生向けの歴史読本から引用している⁹。これは、法隆寺のエンタシスが小学生までもが耳にしたことがあり、一般的な話だということを示している。また、JTBパブリッシング発行の観光ガイドブックである『遷都 1300 年祭 奈良の旅』¹⁰において法隆寺が紹介されているページでは、百済観音立像と共にエンタシスの柱も、「金堂や回廊の柱はギリシアのパルテノン神殿と同様、中央がやや太く、上下が細いエンタシスという形式」¹¹と記述されている。

以上から、確かな証拠がない法隆寺とギリシア神殿の柱の伝来関係が、一般的な知識となり、今なお人々の意識の中で一般化されているということが理解できた。本研究では、法隆寺の歴史的事実を追求することではなく、法隆寺について語ってきた人々が、法隆寺をどのように理解してきたのか、そしてその位置付けがどのように変遷しているのか、ということを追う井上の研究方法を参考にして論じる。本研究で精神史という研究方法を使う理由としては、奈良における歴史的事実の真相の追求を目的とするのではなく、あくまでも奈良を見てきた人々の印象について論じることを目的としたいと考えるからである。

また、精神史という考え方を採用するにあたって、ガダマーの解釈学について少し触れておきたい。ガダマーは 20 世紀の解釈学に多大な影響を与えたドイツの哲学者である。ガダマーの考えによると、人は特定の伝統に帰属しており、その伝統がもたらす先入見によって、理解の可能性と理解の地平を限定している。ガダマーにとって

の伝統とは、過去に産出されたテキストの伝承のことである。そのような伝承において、テキストとの対話による衝撃が、先入観を自覚、修正するとともに、過去を現在へと媒介し、より高い普遍性をもった共通の地平へと到達する。ガダマーはこれを「地平の融合」と名付けた¹²。過去のテキストは、時代の変遷によってその解釈も少しずつ異なり、そのような過去の捉え方と現在の捉え方との融合によって成り立っている。解釈学の対象とすべきは、この融合にあるのではないだろうか。これは、精神史と言い換えることが可能であり、過去に産出されたテキストの内容に関してではなく、テキストが受容され、理解されてきた意味に焦点を当てることが重要であるといえる。以上のガダマーの論については、奈良のイメージ形成と結びつけて第2章で再度考察する。

第2節 和辻哲郎『古寺巡礼』における奈良

和辻哲郎『古寺巡礼』は、近代以降に形成された奈良のイメージを語るうえで欠かすことのできない著作である。なぜならこの著作は、人々に近代奈良の新しい印象を与えるきっかけとなったからである。

井上は『法隆寺への精神史』において、『古寺巡礼』が大和の古寺巡礼に関してまとめたものとしては最初の例であり、その後相次いで刊行された大和古寺を鑑賞する書物の端緒をひらく著作であった、と指摘している¹³。さらに井上は、古代日本にギリシア文明の反映を読む見方も『古寺巡礼』によって普及し、実際『古寺巡礼』をきっかけにし、そのような理解があるということを知った人も多いだろうと述べている¹⁴。

事実、『古寺巡礼』の発表以降、亀井勝一郎『大和古寺巡礼』¹⁵、土門拳『古寺巡礼』¹⁶、白洲正子『私の古寺巡礼』¹⁷、といった著作が多く発表されている¹⁸。全てを網羅してはいないが、以上のことから、『古寺巡礼』が人々に与えた影響の大きさを推測することができる。『古寺巡礼』の与えた影響が一般読書界、そして文学界にも及ぶことから、本研究では和辻の『古寺巡礼』を出発点として議論を進める。

和辻哲郎¹⁹は、兵庫県神崎郡²⁰生まれの哲学者である。『古寺巡礼』は、1918（大正7）年の5月に和辻が友人とともに奈良の古寺を見物した際に著されたものであり、1919（大正8）年、和辻が30歳の時に岩波書店から出版された。

1918（大正7）年は、第1次世界大戦が終結した年である。大正時代はデモクラシーの時代であり、近代化、西欧化が日常生活に浸透してきた時期であった。一般的な日本人の近代意識が花開き、それは大正時代の風俗、政治経済、芸術、哲学、文学、科学や医学にも影響をもたらした²¹。近代日本の文化に関する著作や論文を数多く発表している竹村民郎は『大正文化 帝国のユートピア——世界史の転換期と大衆消費社会の形成——』²²において、国際政治の面で、日本は世界五大国のひとつに数えられる地位を獲得した時期であったと述べている。そのため、1920年代の日本の様子を理解するためには、特に国際的視野と世界文化の接触面を重視しなければならない²³。

そのような時代のなか出版された『古寺巡礼』は、学問書や旅の記録、現代の観光ガイドブックにあたるようなものではなく、印象記という性格を持ったものであった。そのため、現代の知見によって読み進めると、奈良の歴史的な事実と、和辻が述べている内容との間に多少の矛盾点が生じる場合もあることがわかる。しかし、同改定序において和辻が述べているように、『古寺巡礼』はあくまでも印象記である。そのため本論稿では、建築物や仏像などを目にした際の和辻の空想と歴史的な事実との間の真偽を判定することに焦点を当てるのではなく、和辻が感じた素直な印象を読みとり、そこから、和辻が『古寺巡礼』において思い描いた時代における奈良の印象、そしてその印象が人々に与えた影響と変遷を考察する。

次に、『古寺巡礼』の具体的な内容について考察する。この巡礼における和辻の空想に共通していえることは、かつて日本の都があり、政治の中心地であった奈良を通して、実は奈良ではなく世界、特にギリシアを見ているということである。また、その空想は実に直感的である。世界的な視野で奈良を読み解く手法は、新鮮なものであった。

例えば、和辻は法隆寺を訪れた際に、金堂の柱にエンタシス²⁴を感じている。この箇所からも、和辻は法隆寺という建築物を見て、ギリシアつまり世界に目を向け、思いを馳せているということがわかる。しかし、法隆寺のエンタシスは、和辻が最初の発案者ではないということをここで確認しておきたい。井上によると、最初に法隆寺の柱にギリシアの影響を読み取ったのは、日本建築史学の開拓者として知られている伊藤忠太である²⁵。伊藤は1893（明治26）年に『法隆寺建築論』と題した論文を発

表しており、このなかでギリシアのエンタシスが法隆寺に伝わったという考えを述べている。

和辻は法隆寺のエンタシスの他にも、『古寺巡礼』において一貫して、奈良を世界的な視野で読み解いており、奈良と世界、特にヨーロッパとの関係性に目を向けている。以上のような空想は『古寺巡礼』の全体を通じて読み取ることができる。これら和辻の視点から『古寺巡礼』が書かれたことによって、奈良と世界に影響関係がある、そのような考えを持つことができる、というイメージが一般化し、人々に受容されてきた。

また、和辻は『古寺巡礼』において、仏像を信仰の対象としてではなく美術作品として捉えている。しかし、仏像が造られた時代まで遡ると、それは展示され人々に鑑賞される美術作品ではなく信仰の対象であったことを忘れてはならない。

例えば、東京国立博物館²⁶や九州国立博物館²⁷の展示などで近年一層注目されている興福寺の阿修羅像は、かつてバルシャなどでは大地にめぐみを与える太陽神として、インドでは熱を招き大地を干上がらせる太陽神として、常にインドラ（帝釈天）と戦う悪の戦闘神として信仰されてきた²⁸。しかし、現代では、阿修羅像を博物館で展示していることからみても、仏像を信仰の対象ではなく、美術作品として捉えている人々が多いということが考えられる。

阿修羅像は、2010（平成22）年3月まではガラスケースの中に入れられていたが、現在はそのガラスケースを排除した状態の中で、より間近で拝観することができるようになっている。興福寺創建1300年の記念事業として東京国立博物館、九州国立博物館で展示された際には、これまでは正面からしか見ることができなかった阿修羅像を360度、自分の好きな角度から拝観できるという点も話題となった²⁹。東京国立博物館と九州国立博物館での展示後は、再び奈良での展示が行われた³⁰。しかし、その展示場所は従来の興福寺国宝館ではなく、仮金堂で見られるということが重要な点であった。阿修羅像が堂内に戻った、ということは阿修羅像を美術作品ではなく、信仰の対象という本来の姿に戻すという意識が再び戻ったということを物語る出来事であるといえる。

以上のように阿修羅像の存在位置は、信仰の対象から芸術の対象へと、時代において徐々に変化してきている。阿修羅像が置かれる場所の変遷によって、人々の仏像に

対するイメージの変遷の一部分を知ることができた。同じ阿修羅像であっても、時代の変遷によってイメージが移り変わっている、ということに重きを置くこれらの考えが、精神的な考えであるといえる。

田中英道は『法隆寺とパルテノン』³¹において、仏像や文化財と対面するときには、信仰の対象として対する姿勢と、純粹に美術作品として対する姿勢があると述べている。田中³²は、信仰の対象として対する姿勢と、美術作品として対する姿勢は併存するものであって、峻別できるものではないが、仏像を美術の対象として見る場合でも、古い仏像を前にして自然と手を合わせる気持ちが起こってくるものであると述べている。多くの人にとって、それは千年も前の個人の知恵と、それを守り伝えてきた人々の信念に対する畏敬の念がそうさせるのであって、信仰心とは違う、という考えである。

また、『古寺巡礼』から多大な影響を受けた文筆家である町田甲一も『大和古寺巡歴』³³のなかで、仏像の観賞³⁴の仕方について論じている。町田は、識者のなかの保守的な人々は、仏像は拝むものであるため博物館や美術館で見るべきものではなく、周囲が暗い御堂のなかでも、本来その仏像が安置されている場所で拝観するべきだという考えをもっていると指摘している³⁵。ところが町田自身は、仏像の美しさや芸術的な美しさを理解する場合、果たして本来仏像が安置されている場所での観賞が最もふさわしいといえるのか、と疑問を抱く。法隆寺の百済観音は、現在では1998（平成10）年に完成した大宝蔵院・百済観音堂に安置されているが、町田が法隆寺を訪れた時代には、百済観音を1939（昭和14）年に完成した大宝蔵殿で、正面からのみではなく側面からも眺めることができた。これによって、百済観音の細部まで観賞することができた。そのため、町田は、かつて金堂内や博物館で百済観音を拝観した人々と感じ方は異なるが、大宝蔵殿では、見る人の宗教的・文学的に誇張された主観の加わらない「対象そのものがもつ本当の美しさ」を実感できるようだと述べている³⁶。

そもそも美術という言葉は古来の中国にも日本にもなく、明治維新後に西洋の言葉の翻訳として用いられ始めた。美術の概念はなかったものの、日本の職人が作った物は古物として扱われ、そのなかの美しいものなどは宝物として大切にされてきた。しかし、明治維新により幕藩体制が崩壊し、開国・文明の世が到来すると、西洋の制度や文物、風習を模倣することがよしとされ、古来の古物や技術、美意識は役に立た

ないものだとされた。その結果、代々伝わってきた貴重な美術品が骨董屋の店先で店晒しにされたり、不用品として破壊されたりしてしまった。さらに古物の危機に拍車をかけたのが1868（慶応4・明治元）年に発令した神仏分離令であった。これによって廃仏毀釈が起り、寺院の建物や仏画、仏像、仏具などが破壊されてしまった。廃寺にされた寺の仏像が薪にされる、各所から集められた仏像が積み上げられたまま放置される、という事態が起こった³⁷。

廃仏毀釈の意味をみると、「廃仏」は、それまで仏教の寺院として存在したものを、無用なもの、必要のないものとして廃棄処分するという意味である。また、「毀釈」は、釈教を毀謗し、弾圧する意味と釈教に関係する諸施設、特に堂塔・伽藍および仏像、經典、仏具等を破壊し、毀損し、焼却する意味とが表現されている³⁸。

そのような意味を持つ、廃仏毀釈に最も影響を受けたのは興福寺であると言われている。興福寺は、阿修羅像を所蔵する場所であり、現在では世界文化遺産にも登録され³⁹、まさに奈良を代表する場所のひとつであるといえる。

浅田隆、和田博文『古代の幻——日本近代文学の〈奈良〉』⁴⁰において、興福寺は廃仏毀釈の影響により50円や250円⁴¹といった驚くほど安価で売りに出されていたという記述がある。現代では世界文化遺産に認定されている興福寺であるが、廃仏毀釈の影響によって、木材はもとより、金具もそれほど価値がなく、現代における興福寺と、廃仏毀釈の影響を受けた時代の興福寺とでは、人々の価値観に大きな差異があることが理解できる。廃仏毀釈が起こった時期と、和辻が訪れ『古寺巡礼』を執筆した時期とでは人々の奈良に対する印象に大きな違いがある。同じ奈良という場所でありながら、時代によって奈良に対する見方が変容する。これが本研究の中心である奈良の精神史であるといえる。

和辻は『古寺巡礼』において、寺院だけではなく、帝室（国）博物館⁴²においてもさまざまな仏像を目にする。帝室（国）博物館に多くの仏像が並んでいた理由としては、廃仏毀釈やその他の事情によって寺院が力を失い、仏像を守ることができなくなってしまったからである。そのため、仏像を帝室（国）博物館に寄託して修理をせよという話がかたがちがとられていた。その後、東洋美術史家であるアーネスト・フェノロサと、その助手である岡倉天心によって仏像の価値が再認識され、それが古美術の保護に繋がり、今日に至ることとなる。

これまで述べてきたように、和辻は『古寺巡礼』において、かつて日本の中心であった奈良の仏像や寺院を通してヨーロッパに思いを馳せた。この著作によって、古代日本にギリシア文明の反映を読み解く見方が、広く一般に普及したといえる。しかし、この見方がたんなる和辻の思いつきではないことを検証するために『古寺巡礼』が書かれ、発表された時代背景を考察してみたい。『古寺巡礼』が書かれたのは1918（大正7）年、発表されたのは1919（大正8）年である。大正時代というのは近代化や西欧化が日常生活に浸透してきた時代である。実際に和辻も、青年時代の興味の対象は、ヨーロッパの同時代文化であり、和辻の大学時代に流行したのものとして、ロシアや北欧の文学や印象派絵画、ロダンの彫刻を挙げている。和辻は、その頃の様子を後に「そのころには次々と気を取られるものが多く、特に『新しい』ということが異常な刺激をわたくしたちに与えていた」と述べている⁴³。『古寺巡礼』における和辻の見方は、個人的なものではなく、このような時代背景が影響していると考えられる。以上のことから、『古寺巡礼』は、奈良の精神史を知る大きな手掛かりであるといえる。

第2章 和辻以降の奈良論 — 多様性への視点 —

『古寺巡礼』以降に発表された著作における和辻の影響について述べるにあたって、ガダマーの影響史について触れておきたい。影響史⁴⁴はガダマーが『真理と方法』で述べている概念であり、現代思想界に多大な影響を与えた。ガダマーによると、人間はある特定の伝統に帰属しており、伝統とは、過去の遺物や痕跡ではなく、過去から現在に伝承されてきた無形のものである⁴⁵。林文孝⁴⁶の考察を参考にすると、伝統といわれるものの条件は、世代を超え、長期間にわたって固定性を保って伝えられるものである。加えて、それが人々の生活を律していることも伝統の条件であり、このような意味から、伝統とは過去の沈殿物、つまり変化しないものではなく、現在に受け継がれ、生きるものであるといえる。

さらにガダマー論の検討を進める。林によると、人間は、歴史的存在として伝統に帰属しており、この伝統は先入観を形成し、先入観の理解を可能にするとともに、人々の理解の地平を限定している。ガダマーの言うところの伝統とは、過去に産出されたテキストの継承である。テキストには一度形成されたイメージも含まれており、

そのテキストを人間が読むことによって、自らの先入観を自覚し、修正するとともに、過去を現在へと媒介する⁴⁷。過去を理解するということは、過去を現在に媒介することであり、過去を現在に同化することでもなければ、現在を過去に同化することでもない。現在の地平が過去の地平と融合することで過去を理解することができる。「地平の融合」とは、過去の働きと現在の働きとが出会い、新たな意味を創り出すという出来事である⁴⁸。

次に影響史という概念について検討する。ガダマーはこの概念によって、作品自体と作品の解釈とを切り離すべきであるという、従前の考えを乗り越えようとした。作品はそれぞれの時代においてさまざまに解釈され、次々と後代に生まれた解釈は、時代から時代へと伝承されていく。作品は解釈の歴史とひとつになり、現代の作品理解を規定している。これが影響史であり、影響史とは一言でいえば、伝統の働きである。現在は過去に規定されつつ、新たに未来を形成していく。歴史とは、このような内発的な運動である。先ほど述べたように、伝統とは、過去の再現であるとともに、現在における創造でもあり、時代が流れるにつれ、徐々に変化をもたらす。理解において、伝統がたえず新たに形成されていく⁴⁹。

これまで述べてきたガダマーの理論を、本論稿の中心である奈良に應用して検討したい。本論稿の手掛かりとしている和辻の『古寺巡礼』をガダマーでいうテキストに見立てる。先ほど述べたように、テキストは過去に一度形成されたイメージを含んでおり、『古寺巡礼』を理解する際、和辻の考えそのものと一体化しようとするのではなく、これまで『古寺巡礼』が受容され、語られてきた意味に参与することが重要であるといえる。亀井や町田といった和辻に影響を受けたとされる者は、和辻の考えに賛同する者、疑問を抱く者、とそれぞれの考えを持っている。しかし、和辻の考えから離れた全く新しい場所で自らの考えを論じているのではなく、和辻による奈良の解釈の地平上で奈良を論じているといえる。現在の奈良は、これまでの奈良の伝統と、和辻が与えた奈良のイメージが融合されているのであり、和辻もまた、融合されたイメージのもとで奈良を論じており、融合の連鎖が行われているといえる。

第1章で述べたように、和辻の『古寺巡礼』は奈良に関して述べている主要著作のひとつである。文化人が自身の著作において、『古寺巡礼』の内容に対し賛同している部分、批判している部分、などさまざまな解釈をしているが、間違いなく『古寺巡

礼』から多大な影響を受けていることが理解できる。和辻が設定した見方から、奈良を美術的な性格をもつ都市、宗教的な性格をもつ都市といったように、受け手、つまりこの場合には著者によって異なる見方がされているといえる。例えばこれらの見方は、亀井や白州、矢代といった、奈良を宗教都市としてみる見方、そして現代の仏像を芸術作品としてみるといった芸術都市としての見方、そして観光都市としての見方という、大きく3つに分類された見方が存在する。現在では、第1章第2節において述べた博物館での阿修羅像の拝観によって起こった仏像ブームをきっかけに、親しみやすいイラストと共に仏像を紹介する著作⁵⁰なども数多く出版されている。この出来事も、仏像を芸術作品と位置付ける見方に繋がっているひとつの要因であるといえる。

このように、和辻の受容者によって一見さまざまな見方をされている奈良であるが、本来は、30歳の和辻哲郎という人物によるひとつの見方であった。そのため、現代の奈良のイメージは、和辻が捉えた奈良のイメージが分化したものであるといえる。それでは実際、和辻が捉えた奈良のイメージがどのように分化し、現代の奈良に生きているのであろうか。第3章で考察する。

第3章 メディア論としての奈良

第1節 アジアへの回帰

和辻の『古寺巡礼』が発表された後、奈良はヨーロッパと文化史的な影響関係にあるという印象が流布し、一般化された。それでは、現代の奈良⁵¹は人々にどのような受容の仕方をされているのだろうか。

現在の奈良は、『古寺巡礼』によって一般化されたヨーロッパとの繋がりではなく、アジアと繋がっているという印象が強いのではないかと考える。2010（平成22）年に奈良県内各地で行われた平城遷都1300年祭⁵²でも同様の傾向が見られた。遷都1300年祭の公式ガイドブックなどによると「東アジア未来会議 奈良2010」をはじめ、「日中韓文化交流フォーラム」など多くの国際イベントが行われたが、いずれもアジアとの繋がりを感じさせるタイトルや内容であった。その他、奈良県では平城遷都1300年の記念事業の一環として、アジアに関するプロジェクトを遂行しており、関連著作も出版されている。また、毎年秋に奈良国立博物館で開催されている東大寺・正倉院展でも、シルクロードがキーワードとなっている。この正倉院展が毎年開

催されていることも、人々に奈良がアジアと影響関係にあるという強い印象を与えていることに繋がっているといえる。

正倉院展のイメージについては、井上が『法隆寺への精神史』⁵³において述べている。井上は、正倉院展に毎年多くの人々が訪れる要因は、その国際性や年代の古さにあるという。今から千年以上も前の、中央アジア、イランさらには地中海沿岸の品々がシルクロードを通じて古代の奈良に伝わったことは、世界の歴史を現代の人々に語りかけてくれる一種のタイムカプセルであり、それが現代の正倉院展のイメージであると指摘する⁵⁴。

なぜ現在の奈良は、和辻が捉えたヘレニズムを重要な源流のひとつとするヨーロッパ⁵⁵よりも、アジアと繋がっているというイメージの方が強く持たれているのであろうか。それは、戦後の日本とアジアの関係から読み取ることができる。戦後日本の思想は、1945（昭和20）年8月15日の日本敗戦を契機に新たなものとなった。敗戦以降の日本とアジアの関係をみると、戦前は東洋やアジアに対して高かった関心が消え去り、戦前のアジア侵略主義への反省から、アジアとの断絶が急速に時代の風潮となった。

近代日本のアジア認識を方向付けた書籍を、青木保他『日本人の自己認識』⁵⁶から検討したい。青木「近代日本のアジア認識——文化の不在——」によると、近代日本のアジア認識を方向付けた書籍として、福沢諭吉が1875（明治8）年に著した『文明論之概略』と岡倉天心が1903（明治36）年に著した『東洋の理想』を検討しなければならない。

福沢諭吉は、世界の文明を、欧・米諸国を文明国、中国、インド、トルコ、日本といったアジア諸国を半開の国、アフリカやオーストラリアなどを野蛮の国、という3段階に分類した。『文明論之概略』において、アジアの古代文明に関する言及は多々あるが、福沢はいずれも否定的に論じている。アジアから独立し文明国として進歩しなければならなかった日本にとって、アジアの文化は、新しい革新の動きを封じ、進歩を阻害するものであると考えられていたようである。

岡倉天心の『東洋の理想』では、理想の範囲としての日本の芸術理想の位置付けを行った後、その歴史を振り返り、アジア文化の貯蔵庫、アジア文明の博物館となった理由を明らかにしている。青木は、『東洋の理想』から、天心にとって日本とは、世

界に向けてのアジア文化の総合発信地としての地位にあるものであった⁵⁷、と読み取っている。

福沢は、欧・米の進入に対して、文明開化によって独立を保つことが可能であるといい、西洋文明の優位を説いたうえで、文明開化を進める必要性を説いた。そのため、アジアからの独立を説き「脱亜入欧」を掲げた。岡倉は、アジアの芸術理想と美の伝統の偉大さを近代的諸悪から擁護し継承発展させることのできるのは日本だけであると主張する。このように、福沢は西欧の優位、岡倉はアジアの優位を説いている。一見異なる主張のように思えるが、どちらも同じ方向を目指しているといえる。福沢も岡倉も、日本を軸にしてその優位を説いていたのだ⁵⁸。

しかし、1945（昭和20）年8月15日の敗戦以後、戦前に高まっていた東洋やアジアへの関心は消え去っていった。日本を代表する思想家である柳宗悦は「東洋文化の教養」において、学生の柳にとって、儒教や仏教、漢学といった教えは古いもののように思われ、キリスト教の方が斬新で魅力的であったと述べている。柳は東洋の文化を時代遅れの文化であると考え、それに比べて西洋文化は新しい時代に役立つものであると考えていたことがわかる。青木は『日本人の自己認識』において、上記の考え方は、柳の個人的なものではなく、明治から大正にいたる日本の文化人や知識人の一般的な知的関心のあり方を示すものであると指摘している⁵⁹。柳が学生であった明治時代の末は、人々の考えが過渡期であり、日本が新しい生活に入ろうとする時期であった。つまり、柳の学問に対する興味は、時代の流れに影響されたものであったと考えられる。

ところが、西洋文化に大きな興味を抱いていた柳に次第に考え方の変化が生じる。柳は、西洋文化から多くのものを学んだが、それらの知識や経験は東洋への無智を伴ってはならないと考えるようになった。そこから柳の興味が西洋文化から東洋文化へと移り変わる。

第1章第2節で述べたように、和辻の『古寺巡礼』におけるヨーロッパを通して奈良を見る見方は、和辻の個人的な思想ではなく、時代の流れに大きく影響されたものであったと考えられる。以上から考えると、日本人が再びアジアへと目を向けたことが、奈良とアジアが繋がっているというイメージの形成へと発展したことは必然であったといえる。

第2節 ネットワーク化するイメージ

これまで見てきたように、奈良はかつての日本における政治の中心地でありながら、和辻によって世界、特にヨーロッパと影響関係にあるという見方が受容された。そして、その見方は、時代背景によって変化している。日本がヨーロッパに注目していた時代にはヨーロッパと、アジアに注目していた時代にはアジアと、奈良が繋がっているという見方が人々に受容されてきた。

現在の奈良は、正倉院展に代表されるシルクロードとの繋がりがあったことから、国際都市と位置付けられる場合もある。例えば、2010（平成22）年に行われた平城遷都1300年祭は、「はじまりの奈良、めぐる感動」をテーマに2010年1月1日から1年間、メイン会場である平城宮跡をはじめ、奈良県内外で開催されたイベントである。開催趣旨⁶⁰によると、奈良時代は唐の影響を強く受けるとともに、大陸との交流を通じて、インド・ペルシャ・アラビアなどユーラシア各地からさまざまな文化を取り入れた時代であった。そのような日本の歴史を振り返り、未来への理解に繋げるためのお祭りであると定義されている。さらに平城遷都1300年祭は、歴史・文化遺産の普遍化や観光交流の一層の拡大といった奈良県・関西の振興を図るとともに、日本と諸外国との相互理解の促進に寄与することを目的とするとされている。復元された大極殿前の特設会場で行われた記念式典では、奈良とアジアに関する様々なイベントが行われた。これは、奈良とアジアの繋がりを意識させるメディアイベントであるといえる。メディアイベントとは、主にワールドカップや皇太子成婚パレードなどが例に挙げられ、それを見る人々に社会の基本的価値を再確認させ、人々の連携を強化する働きをもつ。平城遷都1300年祭でアジアに関する楽劇や音楽を披露することによって、現在の人々の奈良へのイメージがよりアジアと深い関わりを持つことになる。

そのような平城遷都1300年祭や正倉院展において観覧者は、本来の奈良の姿を見ているとはいえないのではないかとこのことをここで指摘しておきたい。正倉院展を例に挙げると、観覧者は、シルクロードを経由して奈良に伝わった宝物を本来とは異なる博物館という空間内で見ている。また、その宝物は、企画のテーマに沿った出展者の意図によって選出され、展示されているものである。つまり観覧者は、第三者によってあらかじめ選出され、パッケージ化された奈良の姿を見ているといえるのではないだろうか。人々は、企画者による芸術都市としての奈良の見方を受け入れている

のである。

亀井は『大和古寺風物誌』⁶¹において、仏像を美術作品ではなく信仰の対象だと位置付けている。そのため、博物館は僅かな時間でたくさんの尊い遺品に接することができるという長所もあることを認めたうえで、仏像を展示することに疑問を抱いている⁶²。

矢代幸雄は『日本美術の再検討』⁶³において、芸術的鑑賞本位にお寺へ行き、仏像を見るということに疑問を抱き、日本美術史や仏教美術史が進んだために、近頃は仏像を主に彫刻芸術として見るようになった⁶⁴と指摘している。

これまで考察してきたように、『古寺巡礼』の視点から述べると、後の文化人や一般読書界に受容された、和辻のイメージが、時代が移り変わるに連れ、主に芸術都市、宗教都市、観光都市というイメージへと分化し、影響関係があると考えられた場所もヨーロッパからアジアへと変化した。

例えば、芸術都市の視点を持つ文化人として田中英道⁶⁵が挙げられる。これまでも述べてきたように、田中は『天平のミケランジェロ』や『法隆寺とパルテノン——西洋美術史の眼で見た新・古寺巡礼』において、美術史家の視点から奈良を検討している。そこでは、仏像と西欧彫刻の作者についての考察、アテネ、奈良、フィレンツェの類似性などが述べられている。田中によると、その類似性は、都市の規模や、凝縮された造形美術が残されている点からいえるという。田中の検討対象は、西欧文化が中心となっているものの、インドや中国、朝鮮文化などとその視野は広い。田中は、自身の著作全体を通して、『古寺巡礼』に直接的に大きな影響を受けたことは特別言及していないが、『古寺巡礼』が発表された以降の文化人に与えた影響から、田中も少なくとも和辻の影響を受けたものと考えられる。

奈良は言うまでもなく仏教都市であった。白洲正子は、主に奈良の宗教的側面を近代において捉え直した作家であるといえる。白洲は、『私の古寺巡礼』において、若狭の羽賀寺⁶⁶を訪れた際に、仏像の観賞の仕方について指摘している⁶⁷。羽賀寺の十一観音を照らす照明が、ろうそくの火影から蛍光灯に変化していることについて、それは観光客に向けた照明方法だろうが、やはり仏像は信仰の対象であるため、灯火の下で拝みたいと述べている。さらに、白洲が『古寺巡礼』を持って聖林寺を訪れた際にも十一面観音の鑑賞方法について述べている箇所がある⁶⁸。仏像を見る際には環境

も大切だといひ、博物館や展覧会に並んでいるものは、研究のためには合理的であるかもしれないが、自由に鑑賞したい者にとっては物質的に思えてしまうと述べている。白洲が聖林寺をはじめ訪れた頃に十一面観音は暗い部屋の中に置かれていた。現在⁶⁹では、コンクリートの収蔵庫に入っているが、暗い部屋の中で見た時ほどの感動を白洲は受けなかった。それは、「仏さまをお守りしているという雰囲気があるでない」からであり、火災や地震から守るためにはコンクリートの収蔵庫が必要であるだろうが、白洲にとっては何かよそよそしい冷たさを感じずにはいられなかった。このように白洲は、完全な信仰心を持っていたと断言することはできないが、宗教的側面から強く奈良を捉えていたことがわかる。

続いて写真家である土門拳について検討する。土門は、エッセイ『写真と人生』⁷⁰において、自身の著作である『古寺巡礼』に収めた寺や建築や仏像は、すべて著者の好んだものであると同時に、ハッと胸打たれたものばかりであると述べている。そして、それは私たちの祖先が積み上げてきた日本人のエネルギーを内に秘めているものたちであるという⁷¹。土門は、主に奈良の仏像や風景を写真という表現方法で捉えているため、奈良を芸術都市として位置付けていると考えられる。しかし、上記のエッセイにおける引用部分を検討すると、著者の精神に関わる、宗教都市に近いような捉え方もしているといえるのではないだろうか。

続いて、奈良の観光都市としての性格について検討する。奈良は日本有数の観光地として知られ、毎年多くの人々が訪れる。平城遷都 1300 年祭が行われた 2010 (平成 22) 年には 18,415 千人もの人々が訪れ、これは前年の 13,966 千人に比べて 4,449 千人の増加となった⁷²。このような観光客は奈良をどのように見ているのだろうか。例えば、和辻が『古寺巡礼』において巡った奈良と、現在の観光客が巡る奈良とを比較すると、そのルートが重複していることがわかる。ダニエル・ジョセフ・ブーアスティンの『幻影 (イメージ) の時代 — マスコミが製造する事実』⁷³を参考にすると、観光客は疑似イベントによって経験を満たしているという。つまり、観光客は本物よりもイメージを求めているといえる。現代の観光客はガイドブックを手にして奈良を訪れ、ガイドブックに掲載されている内容と実物とを確認しながら奈良を巡っているのだ。

以上の例からも理解できるように、現在の奈良のイメージは多様化している。それ

では、現在の奈良は、『古寺巡礼』の印象が分化し、さまざまな印象が個々に存在しているという結論に留めていいといえるであろうか。

再度確認してみると、田中は芸術的側面から奈良を捉えているが、白洲は宗教的側面、土門は、芸術的側面に加え、宗教的側面からも奈良を捉えていることがわかる。芸術的側面と宗教的側面の両方の見方を持って奈良を理解しているのだ。これら二つの側面は、それぞれ異なった視点で奈良を捉えたものであり、奈良には異なる視点からのイメージが共存しているといえる。

このように、現在の奈良のイメージは、分化した『古寺巡礼』のイメージが繋がり、共存することによって構築されている。つまり、現代の奈良は、宗教都市、芸術都市、観光都市といったように一言で表現することが難しい。これまでひとつの統一されたイメージで語られることの多かった奈良が、和辻の『古寺巡礼』によって、さまざまなイメージを持つことが可能だという考えに繋がるきっかけとなった。奈良をみる者それぞれが、自由に奈良を位置付けていいのだ。

以上のことから、現在の奈良は、人々によって、芸術都市、宗教都市、観光都市であると理解され、また、その見方は奈良を経由してヨーロッパやアジアへ向かうといったように、多様であることが理解できた。そのため、現在の奈良はさまざまなイメージを繋ぐ中立の立場にあるメディア都市であるといえる。現在の奈良はさまざまな捉え方が可能であり、人々の奈良に対するイメージは多様である。そのため、世界のなかの奈良、アジアのなかの奈良、日本のなかの奈良、そして、芸術都市、宗教都市、観光都市というように多様なイメージとして奈良を理解していくことが必要であると考え、本論の結論とする。

終 章

これまで、本論稿では和辻哲郎の『古寺巡礼』を出発点とし、『古寺巡礼』が発表された大正時代から、2010（平成22）年に平城遷都1300年を迎え、更なる注目が奈良に集まったといえる現在までの奈良のイメージ形成とその変遷を、精神史という概念を用いて考察してきた。

精神史の捉え方は研究者によって少しずつ異なっているが、本論考において精神史とは、歴史的事実を追求することではなく、後世に生きた人々が、歴史上の出来事を

どのように受容してきたのか、ということを追求する研究方法であると定義した。精神史を用いて考察することによって、奈良における歴史的事実の真偽判定ではなく、時代が過去から現在へと移り変わる中での奈良のイメージ形成と変遷を理解することができた。

『古寺巡礼』は、和辻が奈良を訪れた際の印象記であり、国際的視野の中で奈良を捉えていた。奈良を通じて世界、特にヨーロッパに目を向けるという和辻の見方が、後の文化人や一般読書界に受容され、現在でも奈良について書かれた著作の代表として位置付けられている。ところが、奈良を通じて世界、特にヨーロッパへ思いを馳せることは、和辻の個人的な思いつきではなく、『古寺巡礼』が発表された当時の時代背景が影響していた。『古寺巡礼』が発表された大正時代は、近代化や西欧化が日常生活に浸透してきた時代であり、当時の人々は新しいものに魅力を感じていた。そのため、和辻の興味の対象もヨーロッパの文化であったという。

続いて、和辻に影響を受けた、亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』、町田甲一の『大和古寺巡歴』、土門拳の『写真と人生』、白洲正子の『私の古寺巡礼』などを検討したところ、奈良のイメージ捉え方はさまざまであった。そのような奈良に対するさまざまなイメージを、主に芸術都市、宗教都市、観光都市といった3つの分類について考察した。現在では、和辻による奈良とヨーロッパに影響関係をみる見方よりも、アジアとの影響関係をみる見方の方が強い。これは、敗戦後の日本とアジアとの関係から読みとることができ、西洋文化への興味が、徐々にアジアへと向かっていったためである。日本人が再びアジアへ目を向けるという時代の流れがあったことが理解でき、それが奈良とアジアが繋がっているというイメージの形成へと発展したといえる。アジアとの影響関係をみる見方は、例えば毎年秋に奈良国立博物館で開催されている正倉院展や、平城遷都1300年祭記念式典での楽劇などから理解することができる。

以上のことから現在の奈良は、『古寺巡礼』で一般化された世界的視野で奈良を捉えるという見方が分化し、共存しているといえる。そのため、奈良を多次元に捉えることが可能であるということが理解できた。ガダマーの地平の融合に、奈良のイメージを当て嵌めて考えると、『古寺巡礼』（ガダマーでいうテキスト）を理解する際、和辻の考えそのものではなく、これまで『古寺巡礼』が受容され、人々に語られてきたその意味に参加することが重要であった。これが本研究で用いた精神史という概念で

ある。和辻に影響を受けたとされる文化人は、和辻の考えに賛同する者、疑問を抱く者、とそれぞれの考えをもっている。しかし、和辻の考えから離れた全く新しい場所で考えを論じているのではない。『古寺巡礼』に何らかの影響を受けていると考えられるため、和辻以降の文化人は、和辻による奈良の解釈の地平上で奈良を論じているといえる。現在の奈良は、これまでの奈良の伝統と、和辻が与えた奈良のイメージが融合されているのである。ところが、和辻自身もまた、融合された奈良のイメージのもとで奈良を論じていたのであり、ここで融合の連鎖が行われていることが理解できた。

奈良に対するさまざまなイメージを主に芸術都市、宗教都市、観光都市といった3つの分類について考察した。しかし、現在の奈良のイメージを一言で表現することは難しい。現在の奈良は分類された3つのイメージが個々に存在しているのではなく、共存している。そのため、奈良はメディア都市であると定義付けることができた。奈良は、現在の日本人によって、芸術都市、宗教都市、観光都市とさまざまに理解され、また、その視野は奈良を経由してヨーロッパやアジアを見ていることから幅広いといえる。そのため、現在の奈良は、日本と、アジアやヨーロッパといった世界とを繋ぐ中立の立場にあるメディア都市であるといえる。

しかし、改めて奈良のイメージを考えた際に、奈良には人間の情緒的な感覚が存在することを指摘しておきたい。奈良を訪れた際には、自身の直感を信じる場面が多く出てくるのではないかと考える。つまり、心が赴くままその場所へと向かうのだ。例えば、亀井は春になると奈良へ旅立つようになり、それにつれて仏像の美への憧ればかりではなく信仰心のようなものが芽生えた。その旅になにかもっともらしい名目を付けること無しに奈良を旅することはできなかったが、次第にそのような気持ちはなくなつたという。何かを考えて奈良に足を運ぶのではなく、普段の散歩の延長のような気分でふらっと旅をしたのだという⁷⁴。白洲は、法隆寺を訪れる際にバスや車で乗り付けるのではなく、徒歩で向かう楽しみを感じ、「この忙しい世の中に、呑気なことをいうと思われるかも知れませんが、忙しい時代だから、よけいそういう『時間』が必要なのではないのでしょうか」と述べている。幼い頃からの縁で神社仏閣を訪ねていたことや、宗教に関する注文が多いため取材に行くことが多かった白洲であるが、「古寺を訪ねる心」は持ち合わせていなかった。何もかも詳細に理解することは人間

には不可能だといひ、ただ向こうから近づいて来るものを待っていて捕らえることにした。そのような理由から、白洲は何にも囚われずに、自分の眼で仏像やお寺を見ることができたと述べている⁷⁵。

本研究から、現在の奈良はさまざまなイメージが共存し、一般には日本の始まりの地であると認識されているが、日本の固有体で埋没することがなく、世界と日本を繋ぐメディア都市であることが理解できた。それと同時に、奈良は人間の心と時間とを繋ぐ時空を超えたメディア都市であるともいえるのではないだろうか。

注 釈

- 1 井上章一『法隆寺への精神史』弘文堂、1994（平成6）年。
- 2 和辻哲郎『古寺巡礼』、岩波書店、1919（大正8）年。本論稿では、2007（平成19）年に出版されたワイド岩波文庫版を参照する。本論稿において、著者名の記述がない『古寺巡礼』は、全て和辻哲郎の作品を指す。以下同様。
- 3 佐藤忠良、中村雄二郎、小山清男、若桑みどり、中原佑介、神吉敬三『遠近法の精神史——人間の眼は空間をどうとらえてきたか——』平凡社、1992（平成2）年。
- 4 比屋根照夫『近代沖縄の精神史』社会評論社、1996（平成8）年。
- 5 平野仁啓『古代日本精神史への視座』未来社、1989（平成元）年。
- 6 石田一良『日本精神史』ペリかん社、1988（昭和63）年。
- 7 秋山聰『聖遺物崇敬の心性史——西洋中世の聖性と造形』講談社、2009（平成21）年。
- 8 井上章一前掲書、339ページ。
- 9 井上章一前掲書、6ページ。「なかほどがふとくなっているかたちの柱は、紀元前のギリシア神殿の柱と似ている……」
- 10 『遷都1300年祭 奈良の旅』JTBパブリッシング、2010（平成22）年。
- 11 同上書、85ページ。
- 12 永井均他編『事典 哲学の木』講談社、2002（平成14）年。林文孝、736～738ページ。
- 13 井上章一前掲書、12ページ。

- 14 井上章一前掲書、13 ページ。
- 15 亀井勝一郎『大和古寺風物誌』新潮文庫、1986（昭和 61）年。
- 16 土門拳『古寺巡礼』美術出版社、1963（昭和 38）年。
- 17 白洲正子『私の古寺巡礼』講談社文芸文庫、2000（平成 12）年。
- 18 その他にも、奈良以外の地域を論じた、梅原猛『古寺巡礼京都』シリーズ、淡交社 2006（平成 18）年～や、饗庭孝男『ヨーロッパ古寺巡礼』新潮社、1995（平成 7）年などが挙げられる。
- 19 1889（明治 22）年～1960（昭和 35）年。
- 20 現在の兵庫県姫路市。
- 21 湯浅篤志『夢見る趣味の大正時代 — 作家たちの散文風景 —』論創社、2010（平成 22 年）、7～8 ページ。
- 22 竹村民郎『大正文化 帝国のユートピア — 世界史の転換期と大衆消費社会の形成 —（補版）』三元社、2010（平成 22）年。
- 23 上書、198 ページ。
- 24 エンタシスとは、第 1 章第 1 節、井上『法隆寺への精神史』の箇所所述べたように、ギリシアのパルテノン神殿にある柱の形状のことである。柱の中心がやや太く、上下が細くなっており、この法隆寺の柱の形状がパルテノン神殿と同等であると考えられている。
- 25 井上章一前掲書、15～21 ページ。
- 26 2009（平成 21）年 3 月 31 日～6 月 7 日開催。
- 27 2009（平成 21）年 7 月 14 日～9 月 27 日開催。
- 28 興福寺公式サイト参照。http://www.kohfukuji.com/（2012 年 10 月 15 日取得）
- 29 東京国立博物館、2009（平成 21）年 3 月 31 日～6 月 7 日開催、九州国立博物館、2009（平成 21）年 7 月 14 日～9 月 27 日開催。東京は約 94 万人、九州は約 71 万人が訪れた。
- 30 「興福寺国宝特別公開 2009 お堂でみる阿修羅」2009（平成 21）年 10 月 17 日～11 月 23 日、仮金堂と北円堂にて開催。当時、金堂は修復中であったため、阿修羅は仮金堂に安置されていた。
- 31 田中英道『法隆寺とパルテノン — 西洋美術史の眼で見た新・古寺巡礼』祥伝社、

- 2002（平成14）年、10ページ。
- 32 以下、本文中における「田中」は全て「田中英道」を指す。
- 33 町田甲一『大和古寺巡歴』講談社学術文庫、2003（平成15）年。
- 34 町田は「観照」という言葉を使っているが、本論稿における議論の混乱を避けるために、「観賞」に統一している。以下、町田に関しては同様。
- 35 町田甲一前掲書、234ページ。
- 36 同上書、233～234ページ。
- 37 吉田千鶴子『「日本美術」の発見——岡倉天心がめざしたもの——』吉川弘文館、2011（平成23）年、8～13ページ。
- 38 柴田道賢『廃仏毀釈』公論社、1978（昭和53）年、18ページ。
- 39 古都奈良の文化財（文化遺産）。1998（平成10）年に登録された。
- 40 浅田隆、和田博文『古代の幻——日本近代文学の〈奈良〉』世界思想社、2001（平成13）年、5ページ。
- 41 明治30年の貨幣価値は、当時の1円が現在の約2万円に当たる。そのため、興福寺は約500万円であり、それは公務員の初任給の5か月分に相当する。日本経済新聞社、野村ホールディングス公式サイト「man@bow（まなぼう）」参照。
<http://manabow.com/zatsugaku/column06/index.html>（2012.10.15取得）
- 42 現在の奈良国立博物館（奈良県奈良市）。
- 43 苅部直『光の領域 和辻哲郎』創文社、1995（平成7）年、28ページ。苅部はこの部分を、和辻哲郎『和辻哲郎全集』第24巻、186ページから引用している。
- 44 影響史という言葉は、しばしば作用史、作用影響史などと翻訳されているが、本論稿はさまざまな文献を参考にし、影響史が一般的であると考えたため、以下影響史と統一している。
- 45 丸山高司『ガダマー——地平の融合』講談社、1997（平成9）年、70ページ、138ページ。
- 46 永井均他編『事典 哲学の木』講談社、2002（平成14）年、林文孝、736ページ。
- 47 同上書、林文孝、737～738ページ。
- 48 同上書、林文孝、148ページ。
- 49 同上書、林文孝、149～150ページ。

- 50 田中ひろみ『仏像大好き!』小学館、2007（平成19）年や、仏像ガール（廣瀬郁美）『仏像の本』、山と溪谷社、2008（平成20）年、などが挙げられる。
- 51 本論稿では、2000年頃から平城遷都1300年祭が行われた2010年頃を現代としている。
- 52 2010（平成22）年1月1日～12月31日に行われた。メイン会場の平城宮跡では2010（平成22）年4月24日～11月7日の間、さまざまなイベントが行われた。
- 53 井上章一前掲書。
- 54 井上章一前掲書、33ページ。
- 55 和辻は『古寺巡礼』において、しばしば「西洋」を用いているが、これはヘレニズム文化を源流のひとつとして成立したヨーロッパを指して用いられたものだと考えられる。和辻は、ヘレニズムを通してヨーロッパを見つめ、ヨーロッパと対峙していたのである。
- 56 青木保、川本三郎、筒井清忠、御厨貴、山折哲雄『日本人の自己認識』岩波書店、1999（平成11）年。
- 57 同上書、第2章「アジアのなかの日本」、第1節「近代日本のアジア認識——文化の不在——」103ページ。
- 58 和辻の論と福沢、岡倉の論とを比較する際には、対象となる時代や地域などの差異はあるが、和辻によって一般化された奈良とヨーロッパとの関係を見る見方から、アジアとの関係を見る見方への変化の流れを検討するうえで、日本人の世界に対する意識の変化の過程を知ることが出来る重要な考察であると考えられる。
- 59 青木保、川本三郎、筒井清忠、御厨貴、山折哲雄前掲書、89ページ。
- 60 外務省公式サイト グローカル外交ネット参照。http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/info/pdfs/co2_nara.pdf（2012.10.15取得）
- 61 亀井勝一郎前掲書。
- 62 同上書、43～44ページ。
- 63 矢代幸雄『日本美術の再検討』ぺりかん社、1994（平成6）年。
- 64 同上書、55ページ。
- 65 田中英道『天平のミケランジェロ』弓立社、1995（平成7）年、『法隆寺とパルテノン——西洋美術史の眼で見た新・古寺巡礼』祥伝社、2002（平成14）年。

- 66 福井県小浜市羽賀にある寺院。
- 67 白洲正子前掲書、27～28 ページ。
- 68 同上書、13～17 ページ。
- 69 具体的な時期の記載はないが、少なくとも白洲が『私の古寺巡礼』を発表した1982年（昭和57）年以前であると考えられる。
- 70 土門拳『写真と人生』岩波書店、1997（平成9）年。
- 71 同上書、233 ページ。
- 72 奈良市観光協会公式サイト「奈良市入込観光者数調査報告書・平成22年分」参照。http://narashikanko.or.jp/database/irekomi/h22/irekomi_222.pdf（2012.10.15 pdfにて取得）
- 73 ダニエル・ジョセフ・ブーアスティン『幻影（イメージ）の時代——マスコミが製造する事実』東京創元社、1998（平成10年）、第33版。
- 74 亀井勝一郎前掲書、117 ページ。
- 75 白洲正子前掲書、7～9 ページ。